

第998回オーチャード定期演奏会

3月10日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第161回東京オペラシティ定期シリーズ

3月13日(水) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第999回サントリー定期シリーズ

3月15日(金) 19:00開演 サントリーホール

3/10

3/13

3/15

指揮：アンドレア・バッティストーニ

ソプラノ：ヴィットリアーナ・デ・アミーチス\* カウンターテナー：彌勒忠史\*

バリトン：ミケーレ・パッティ\*

合唱：新国立劇場合唱団(合唱指揮：富平恭平)\*

児童合唱：世田谷ジュニア合唱団(児童合唱指揮：掛江みどり)\*

コンサートマスター：依田真宣

レスピーギ：『リュートのための古風な舞曲とアリア』第2組曲(約20分)

I. 愛らしいウラウ II. 田園舞曲 III. バリの鐘とアリア IV. ベルガマスカ

— 休憩(約15分) —

オルフ：世俗カンタータ『カルミナ・ブラーナ』\* (約65分)

運命 それは世界の女帝

1. おお 運命よ
2. 運命のもたらした傷を 私は嘆く

I. 春

3. 春が素敵な顔を
4. 全てを太陽が暖める
5. さあ見てごらん

緑の野原で

6. 踊り
7. 気高い木々に
8. 小間物屋さん ちょうだいな
9. 輪舞
10. 世界中が俺のもんでも

II. 酒場で

11. 胸の中は滾(たぎ)っている
12. 昔は湖にいたものさ
13. 俺は修道院長だ
14. 俺らが酒場にいる時にゃ

III. 恋の庭

15. キュービッドは飛び回る
16. 昼も夜も すべてのものが
17. 少女が立っていた
18. 俺の心は
19. 兄ちゃんと姉ちゃんが
20. おいで おいで さあおいで
21. 秤にかけてみよう
22. 歎(よろこ)びの時が来た
23. 愛しい貴方

ブランツィフロール(白い花)とヘレナ(絶世の美女)

24. ようこそ 最も美しい女(ひと)

運命 それは世界の女帝

25. おお 運命よ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) 独立行政法人日本芸術文化振興会(3/15)

協力：Bunkamura (3/10)



♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。

♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。

♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

## 出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

3/10

3/13

3/15

1987年ヴェローナ生まれ。国際的に頭角を現している同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の首席客演指揮者、2016年10月東京フィル首席指揮者に就任。

『ナブッコ』『リゴレット』『蝶々夫人』（二期会）、グランドオペラ共同制作『アイダ』のほか、ローマ三部作、『展覧会の絵』『春の祭典』等数多くの管弦楽プログラムで東京フィルを指揮。東京フィルとのコンサート形式オペラ『トゥーランドット』（2015年）、『イリス（あやめ）』（2016年）、『メフィストフェレ』（2018年）で批評家、聴衆の双方から音楽界を牽引するスターとしての評価を得た。同コンビで日本コロムビア株式会社よりCDのリリースを継続している。

スカラ座、フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場、マリンスキー劇場、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル等世界の主要歌劇場・オーケストラと共演を重ねている。2017年には初の著書『マエストロ・バッティストーニのぼくたちのクラシック音楽』（音楽之友社）を刊行。

2021年、東京フィルとの録音『ドヴォルザーク新世界&伊福部作品』欧米盤が欧州の権威ある賞の一つ「OPUS KLASSIK 2021」交響曲部門（20-21世紀）を受賞した。

Website <http://www.andreabattistoni.it/>

Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>



## ソプラノ ヴィットリアーナ・デ・アミーチス

Vittoriana De Amicis, soprano

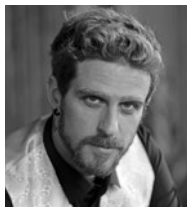
イタリアのラクイラ生まれ。第4回レナータ・テバルディ国際コンクール(サンマリノ)等複数の国際コンクールを制し、2018年～2020年までヴァレンシアのソフィア王妃芸術宮殿にあるブラシド・ドミンゴ研修センターで研鑽を積んだ。これまでのおもな活動として、ウィーンとヴァレンシアでの『フィガロの結婚』、テラモでの『リゴレット』、天津とハルビンでの『仮面舞踏会』『セビリヤの理髮師』『カルメン』、ヘレス・デ・ラ・フロンテラ、コルドバ(アルゼンチン)、アリーナ・ディ・ヴェローナでの『魔笛]夜の女王。また、ヴァレンシアでのマルティン・イ・ソレル『騙された先生』、サンカルロ劇場『トロヴァトーレ』、バルレモ・マッシモ劇場『デイドーとエネアス』、バルマでの『アドリアーナ・ルクヴルール』などもある。コンサートでは、ルチアーノ・パヴァロッティの没後10年を記念したアリーナ・ディ・ヴェローナでのコンサートに出演している。



## カウンターテナー 彌勒忠史

Tadashi Miroku, countertenor

平成24年度(第63回)芸術選奨文部科学大臣新人賞(音楽部門)をカウンターテナーとして史上初めて受賞。千葉大学卒業、同大学院修了。東京藝術大学卒業。二期会・日生劇場『メデア』、佐渡裕指揮『夏の夜の夢』、市川海老蔵特別公演『源氏物語』等の舞台や、オーケストラ・コンサート、さらには「題名のない音楽会」「関ジャム完全燃SHOW」等TV番組にも多数出演する等幅広く活躍。CD「No early music, No life?」(OMF/朝日新聞推薦盤)や著作も「イタリア貴族養成講座」(集英社)等数多い。NHK「テレビでイタリア語」「ぶらあぼ」「教育音楽」等に記事を連載。現在、国立音楽大学客員教授、日本大学芸術学部講師。在日本フェッラーラルネサンス文化大使。二期会会員。



## バリトン ミケーレ・パッティ

Michele Patti, baritone

イタリア・ジェノバ生まれ。複数の国際コンクールに優勝し、ボローニャのテアトロ・コムナーレ音楽院でイタリアオペラの奨学生に選ばれた。最近の活動として、プッセートのヴェルディ劇場、ボローニャ・テアトロ・コムナーレ、バルマ・レージョ劇場の共催によるヴェルディ・フェスティバルのオープニング『愛の妙薬』『ドン・ジョヴァンニ』『椿姫』、バルマのヴェルディ音楽祭での『一日だけの王様』、ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ劇場での『ドン・バスカワーレ』『ラ・ボエーム』『メリー・ウイドウ』『道化師』、コモ歌劇場『ウイリアム・テル』タイトルロール、ベトルツェッリ劇場(パリー歌劇場)『愛の妙薬』、マッシモ・ベッリーニ劇場(カターニア)『椿姫』、ナポリ・サン・カルロ劇場とカラカラ劇場の『カルメン』、ヴェローナ・フィラルモニコ劇場『魔笛』など。

合唱 新国立劇場合唱団(合唱指揮:富平恭平)  
New National Theatre Chorus (Kyohei Tomihira, chorusmaster)



©上野隆文

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、国内外の共演者およびメディアからも高い評価を得ている。

児童合唱 世田谷ジュニア合唱団(児童合唱指揮:掛江みどり)  
Setagaya Junior Chorus (Midori Kakee, children's chorusmaster)



1992年7月に掛江みどりによって世田谷区社会教育団体として創立され、2022年に30周年を迎えた。日本歌曲、国内外の合唱作品、ミサ曲など幅広いレパートリーを持ち、定期演奏会開催、オペラやオーケストラ作品への出演、学校教材等、CD収録も多数。また、世田谷区公式行事他、地域活動にも貢献している。パティストーニ氏指揮東京フィルハーモニー交響楽団とは『オテロ』(2017)『メフィストフェレ』(2018)(いずれも演奏会形式)で共演。近年では新国立劇場『スーパーエンジェル』『トスカ』、東京芸術劇場『夕鶴』『道化師』、田尾下哲演出『マタイ受難曲』にて好評を博す。新国立劇場2023/2024シーズン開幕公演『子どもと魔法』での高評価は記憶に新しい。

## 楽曲紹介

解説=小宮正安

3/10

3/13

3/15

**オットリーノ・レスピーギ**(1879-1936)と**カール・オルフ**(1895-1982)。イタリアとドイツという出身地こそ異なるが、2人の間には、幾つもの共通点がある。

ともに19世紀後半に生まれ、20世紀前半に彼らの代名詞ともなる代表作(まさにそれらこそ、本日演奏される2曲である)を発表した。また、彼らの同時代には忘却の彼方に葬られていた古い音楽を研究し、それを自らの作品に反映させた。さらに、政治的な嵐が吹き荒れるヨーロッパに生き、そのことが彼らの人生に少なからず暗い影を落とした。

そんなレスピーギとオルフの傑作について、より詳しく見てゆこう。

## レスピーギ

## 『リュートのための古風な舞曲とアリア』第2組曲

別段、リュート(16世紀から17世紀にヨーロッパで流行した撥弦楽器)が用いられているわけではない。にもかかわらず、「リュートのための」という断り書きが記されていることを考えると、何とも奇妙な題名だ。

というのもレスピーギは、彼の同世代の作曲家に見られるように、曲がり角に差し掛かっていた同時代の西洋芸術音楽に風穴をあけようとしたからだ。結果彼は、クラウディオ・モンテヴェルディ(1567-1643)をはじめとする古の音楽家に再注目し、その音楽の精神や技法を取り入れてゆく。そうした中で彼が目を向けたのが、16世紀から17世紀にかけて書かれたリュートやギター作品を、イタリアの音楽学者オスカル・キレゾッティ(1848-1916)が編纂・出版した楽譜。これを基に、オーケストラのために自由に編曲した組曲が、『リュートのための古風な舞曲とアリア』である。

組曲は1917年以降、断続的に3度にわたって作られ、1923年にまとめられた2番目のものが第2組曲となる。以下の4つの曲から構成されており、曲ごとにオーケストラの編成が変わる。つまり曲想に応じて様々な音色の変化を味わえるのが特徴であり、オーケストレーションの業に長けていたレスピーギの腕前

が光る。

1. **愛らしいラウラ**：ガリアルダ、サルタレッコ、カナリオという異なる3つの舞曲から成り、それぞれ2/4拍子、6/4拍子、3/8拍子となっている。3曲ともにレスピーギの時代には、ファブリツィオ・カロゾ（1526/35-1605/20）による同名の連作舞曲と考えられていた（なお、「ラウラ」とは、女性のファーストネームである）。

2. **田園舞曲**：ジャン＝バティスト・ブサール（1567頃-1625頃）の作品による。

3. **パリの鐘とアリア**：アリアの部分は、マラン・メルセンヌ（1588-1648）の作と言われる。

4. **ベルガマスカ**：ベルナルド・ジャンンチェッリ（?-1650以前）の作品による。「ベルガマスカ」も舞曲の一形態で、イタリアのベルガモの民族舞踊が基となっている。

一聴すればわかるように、この組曲に溢れているのは単なる「学究的」な姿勢ではない。むしろ奥底には、セピア色に染まった古の世界への回顧の情が脈打っている。またそうした事情もあって、レスピーギは「イタリア精神の復活」をスローガンに掲げた時の権力者ベニート・ムッソリーニ（1883-1945）のお気に入り作曲家と化し、死後はファシズムの協力者として批判の矢面に立たされることとなってしまった……。

〔作曲年代〕1923年 〔初演〕1924年2月17日、ローマにて、ベルナルディーノ・モリナーリ指揮サンタ・チェチーリア王立アカデミー管弦楽団による

〔楽器編成〕ピッコロ（フルート持ち替え）、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、チェレスタ、ハープ、チェンバロ（4手）、弦楽5部

## オルフ 世俗カンタータ『カルミナ・ブラーナ』

3/10

3/13

3/15

1803年、南ドイツのボイエレンという集落にある修道院（ベネディクトボイエレン修道院）で、中世の写本が発見される。そこには、歌や劇のために作られた300以上もの詞が記されており、世の中に対する怒りや嘆き、恋愛や性愛、乱痴気騒ぎの宴や放浪生活の様子などが、ラテン語をはじめ古いドイツ語やフランス語で書かれていた。

つまり謹厳さを旨とする修道院に保存されていた文書とは思えないほど、中世の世俗の人々の喜怒哀楽を赤裸々に描いた内容だった（なおこれらの詞の多くは作者不詳だが、おそらくは主に遍歴職人によって書かれたようだ）。それゆえ、この発見は大きな話題を呼び、やがて1847年にはヨハン・アンドレアス・シュメラー（1785-1852）という文学研究者の編纂によって、写本の全てを記した全集が出版される。

この全集に触発された作曲家が、オルフである。彼もレスピーギ同様、西洋芸術音楽の変革を考えており、例えば、モンテヴェルディのオペラ譜の校訂出版をおこない、彼の作品から多くを学びとった。またイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）をはじめ、同時代の先端をゆく音楽家の動向にもアンテナを張っていた。さらに、体操をはじめ、グラフィックデザインや著述等、多彩な分野で才能を発揮していたドロテー・ギンター（1896-1975）と組んで、1924年にギンター学校を創設。いわゆる「リトミック」教育の第一人者としても活躍中だった。

こうした経験が、1934年から37年にかけて作られた世俗カンタータ『カルミナ・ブラーナ』に結実する。作曲にあたり、オルフは件の全集の中から23作品を選びとり、それらを自在に並べ直した。結果、「運命に対する人間の嘆き」を全体の大きな枠組みに据え、春の到来の中で恋の予感が溢れる**第1部（『春～緑の野原で』）**、社会のはみ出し者となってやけ酒をあおる男たちを描いた**第2部（『酒場で』）**、若い男女が出会い結ばれる**第3部（『恋の庭』）**という構成となった。

さらに元々この作品は、古のヨーロッパにおける音楽の上演形態からヒントを得て、舞踏を伴う演出付きの舞台上で上演されるものとして作られた。またそのこともあって、頻出する変拍子を効果的に採り入れた、きわめてリズムカルな楽曲が全体を貫いている。大量の打楽器はもちろん、オーケストラのあらゆる楽器にも、リズムまたリズムを刻む役割が与えられているのがその証拠だ。



また、ルネッサンスや中世、古代ギリシアにまで遡るような独特の旋法を用いつつ、それらを基に俗謡のような野趣溢れる楽想が頻出するのも特徴だ。独唱が描く登場人物の心情や状況を説明するのみならず、時にはオーケストラとともに主演となって絶大な効果を発揮する合唱（混声合唱と少年合唱）の活躍も、モンテヴェルディのオペラや、さらにそのアイディアの源泉となった古代ギリシア劇に登場する合唱（コロス）を意識したものである。

1937年におこなわれた初演は、斬新な音楽やコンセプトゆえに生じた出演者の戸惑いを乗り越えて大成功。それが、この曲を含む三部作『トリオンフィ』の誕生へと繋がる。

ただし当時は、アドルフ・ヒトラー（1889-1945）率いるナチスが全盛を極めていた時代だった。またそれゆえに、あまりにもあけすけな性愛賛歌や反道徳的な歌詞が、ナチスの掲げる「健全なドイツ精神」に抵触する危険性も充分存在した。それでもナチスは結局のところ、この作品に具わった劇的な演奏効果を認め、オルフ自身もナチスにとって理想的な作曲家として祭り上げられてゆく（ただし彼は、けっしてナチス・シンパではなかったのだが）。

そんな切迫した背景が、オルフの『カルミナ・ブラーナ』の背後には脈打っている。運命の支配から逃れられない人間が、にもかかわらずそれに抗うがごとく、焦燥と熱狂と憧れの中に輝く音楽。オーケストラの憑かれたようなリズムに乗せて、冒頭と終結の合唱に現れる歌詞、「だからこそ今／躊躇せず／弦をかき鳴らせ」は、こうした時代状況を端的に物語っているのではないか。

【作曲年代】1934～37年 【初演】1937年6月8日、フランクフルト歌劇場にて、オスカール・ヴェルタリン（演出）、ベルティル・ヴェッツェルスベルガー（音楽監督・指揮）による

【楽器編成】フルート3（2人はピッコロ持ち替え）、オーボエ3（3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え）、クラリネット3（2人はE♭クラリネットとバス・クラリネット持ち替え）、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、アンティーク・シンバル3、クラッシュ・シンバル、サスペンデッド・シンバル、クロタル、タム・タム、鐘3、チューブラー・ベル、グロッケンシュピール、カスターネット、ラチェット、シロフォン）、チェレスタ、ピアノ2、弦楽5部、ソプラノ独唱、カウンターテナー独唱、バリトン独唱、混声四部合唱、児童合唱

こみやまさやす／ヨーロッパ文化史研究家。横浜国立大学 大学院都市イノベーション研究院 都市科学部教授。著書に『コンスタンツェ・モーツァルト <悪妻>伝説の虚実』（講談社選書メチエ）、『エリザベートと黄昏のハプスブルク帝国 姫君の世界史』（創元社）、『もっときわめる！ 1曲1冊シリーズ 7 リヒャルト・シュトラウス《ばらの騎士》』（音楽之友社）など多数。

3/10

3/13

3/15